

# 家族 戦う

## 防止「人のつながり」不可欠

大学生に広がる大麻。覚せい剤の使用をやめられない若者たち。家族は人知れず悩む。愛知県内の薬物依存症者の家族らの集まり「愛知家族会」は、8日に開くフォーラムのテーマに「変えていく勇氣」を選んだ。回復、予防には人のつながりが欠かせず、公的な治療態勢も求めている。

(永友茂則)

### 活動 語り合う経験

「5、6年前に息子が逮捕された後、1年半くらい一緒に住んだ。勤務をしながら大麻や合成麻薬をやっている感じなんです」。30代の息子が依存症だという男性は語る。「手のつけようがない」2月中旬の日曜、家族会の例会で5、6人が1組になり経験や思いを語り合った。例会でのルールは「言いつばなし、聞きつばなし」。悩んでいるのは自分だけではないことを知り、「家族自身が楽になること」を目指す。

# 依存 薬物

## 若者の大麻・覚せい剤



愛知家族会の会場で語る茨城ダルクの岩井代表(右)名古屋市長のウイールあいち

政府が昨年8月に出した第3次薬物乱用防止5カ年戦略のデータによると、覚せい剤、麻薬・向精神薬、アヘン、大麻の検挙人員は計1万5175人(07年)。覚せい剤の検挙者数は減少傾向だが、全薬物の8割を占めており、中心的課題だ。再犯者は約55%で、増加傾向にある。

一方で大麻の検挙者数は10年前の約2倍に増加。MDMAなどの合成麻薬は大麻と同様、検挙者の8割強が初犯者で、政府は乱用のすそ野が広がっているとしている。また検挙者の6~7割を未成年と20代の若年層が占めており、青少年を中心に乱用されているという。

### 検挙の6~7割、10・20代

依存症者家族の全国的組織である「全国薬物依存症者家族連合会」(薬家連)は、依存症者は犯罪者としてのみ見られ、「身体、精神、社会性などを破壊する全人的病氣」という国際的に広がる見方がなされていない、と訴える。国は08年8月に策定した「第3次薬物乱用防止5カ年戦略」で、薬物依存症者の治療と、社会復帰や家族への支援充実を掲げた。だが、司法や医療などの専門家が横断的につながるシステムは整っていないのが現状だという。

## 「父母・先生に教育必要」

家族会の一員、会員の父親(53)は取材に対し、「一親も回復しないと子どもも回復しないんです」と話す。20代前半の長男が覚せい剤を使用し、現在、依存症者が共同で暮らし回復をめざす「茨城ダルク」で生活している。

長男は高校卒業後、製造業の会社に入社。05年11月のある日、朝が弱い長男をいつものように起こそうとした母親(53)が、注射器を見つける。

長男は「見つかって覚せい剤をやめられる」と言い、両親は見守ることにした。

長男はだんだん食事が取れなくなった。06年9月、朝起きあがれない状態に。会社の人間関係で苦しんでいると理解した。病院で「重度のうつ病」と診断され、休職した。寝たいときに寝る生活。父は時々、「もう、会社に行けるか」と尋ねただけだった。

月に2度、心療内科で診察を続け、08年1月に金属加工会社に転職した。この年の2月、母が息子の部屋で、100本ほどと思われる数の注射器がタオルに包まれているのを見つけた。「昔のもので処分困った」。長男がそう言う

と、父は「覚せい剤の現物は見ていない」からと、やはり行動を起こさなかった。3カ月後、長男は逮捕された。両親は、優しさだと思い就職後も長男にあれこれ手をかけてきた。「世話をやかず突き放す」。薬物依存を学んだ今、夫婦の意見は一致する。

「薬物依存症者は病氣であることを知ってほしい。今のままでは逮捕され、社会に戻り、また逮捕されるという連続になる」

若者が薬物に手を出さないためには何が必要なのか。茨城ダルクの岩井喜代仁代表は「まず保護者や学校の先生への教育が必要」と指摘する。親は「うちの子に限ってそんなことはない」と思い、教師は薬物を使っている子ど

もの対応策を知らないのが現実。人間関係の重要性を挙げ、「子どもが薬物にはまるのは100%好奇心からだ。そんなとき親友が3人いれば、薬物を勧める友達から逃げて、逃げ場所があるから断る勇氣を持てる」と話す。

### 集会 8日 熱田

4回目となる今年のフォーラムは8日午前10時、名古屋国際会議場(名古屋熱田区熱田西町)で開かれる。日本ダルク代表の近藤恒夫さんと茨城県立友部病院医師の中村恵さん、茨城ダルク代表の岩井さんの講演、薬物依存症者や家族の体験談などがある。参加費千円。問い合わせは愛知家族会の林さん(090・7866・6753)へ。